

## 教育厚生委員会 県外調査

1 日 時 令和元年8月27日（火）～8月29日（木）

2 出席委員（9名）

委員長 渡辺 淳也

副委員長 志村 直毅

委員 皆川 巖 河西 敏郎 山田 一功 永井 学

向山 憲稔 飯島 修 小越 智子

3 調査先及び調査内容（主な質疑応答）

### （1）【日本体育大学高等支援学校（知的障害者スポーツ教育について）】

問）来年3月に初めて卒業生が出るが、大学進学ということに関しては、生徒の希望などはどのようなものがあるか。

答）希望はある。初年度入ったのが19名で2名が進路変更をしている。今その17名の中で4名ぐらいが、進路先を専門学校だとか、そういったところに求めている。しかし、特別支援の知的障害の学校を出ても、高校卒業の資格はない。大学に、入れるというのは大学の考えである。進学先に、そういった困り感を持っている人をカバーできるようなものがあればありがたい。

※島崎校長より、校内の視察をしながら質疑を行ったほうが、より理解しやすいのではとの提案を受け、会議室より移動し、視察しながら質疑を行った。



※日本体育大学附属高等支援学校での概要説明、質疑の様子（終了後、施設の視察を行った。）

## (2)【株式会社テルベ(ノーマライゼーションの実践企業としての取り組みについて)】

問) 甲府市では甲府積水産業が、いろいろ地域に参加しているが、テルベでは会社として地域との連携があるか。また、支援者グループホームとはどういう関係か。

答) 第三者の全く別の社会福祉法人である。

問) 地域の連携で今ある課題等があればお聞きしたい。

答) 地域連携の課題としては、まず立地場所の問題がある。町に近いほうが連携しやすいが、この場所に立地した一つの理由として、隣に社会福祉法人で、より重度な障害者の方が通所している建物があるが、そこに通所している方の中からテルベで働くことが可能であればということで設置した。そうした中、地域の連携としては、市役所の福祉関係の部署との関わりがあり、地元の社会福祉協議会や、福祉関係の老人ホームから印刷の受注を受けている。そういったつながりを持ち、老人ホームで開催される夏祭りに当社も出店して、椎茸の販売をしている。当社は市から1%出資していただいているが、認知がなかなか浸透していないので、そういった意味では、まだ努力が必要な部分もある。

問) 今後の展開として障害者雇用を含めいろんな話が社会的に盛り上がっている中、こういう会社を北海道以外の例えば山梨など他県への展開とか展望はあるか。

答) 最初に北海道へ来てしまったということはあるが、本社が東京の千代田区にあるので、今後、東京近辺で障害者雇用の出来る場がつかれないか検討する話が今年になって始まったばかりである。特例子会社同士、同業の連絡会があり、その中で意見交換すると、何々県に今度椎茸の事業をするといった情報が入ってきたりする。この一、二年で300社だった特例子会社は、今500社近くとかなりふえてきている状況である。全体として、特例子会社を設置されている企業がふえている状況である。

問) ここに来る方は、みんな通勤なのか。寮はないのか。

答) 自社での寮は用意していないが、社会福祉法人のグループホームが寮になっている。テルベの場合、グループホームから直接バスでやって来るのではなく、ある程度軽度な知的障害の方々なので、地元のイトーヨーカドー北見店もしくは別の駅があり、どちらかの路線バスの停留所に集合していただいて、そこからテルベの通勤バスにより通ってくるというスタイルである。

問) グループホームからはどのくらい的人数が通っているのか。

答) グループホームからは、20名中半分強の十二、三名になる。残りの方は、車で通っている。

問) 労働時間は8時間なのか。

答) 基本はそうである。通勤バスで通う方々は、短時間のパート契約、時間契約となっており、朝8時45分から午後4時15分、1日6時間30分、休憩60分の勤務となっている。

問) だいたい職種によって違うと思うが、平均月収はどのくらいか。

答) 今パートの従業員に関しては、今年10月に861円に上がるが、北海道の最低賃金が835円、その時間計算になる。最低賃金835円に勤務時間6時間30分、勤務日を週5日で計算するとだいたい十二、三万円の給与となる。

問) 格差はないか。

答) 同一労働同一賃金というのがあるので、その差は設けてはいない。

問) 20名の方は、基本的に正社員なのか。

答) 知的障害の方は、パート社員で時間勤務である。

問) 正社員になっている方はいないということか。

答) 身体障害の方は正社員である。

問) 若い年代の方だと、例えば出産や結婚といったことがある。そういった場合には、正社員の方たちと同じ対応ができるのか。

答) 当然、出産の休暇あるいは出産後の育児休職という制度は整えている。

問) セブン&アイ・ホールディングスの中で、特例子会社を設置しようというときに印刷関係と椎茸、どちらもグループとして、このテルベで純利益を確保して会社を運営されているが、ほかの業種も何か検討されたのか。

答) 当時、ここの場所で何ができるか検討し、印刷に関しては、今よりまだ紙媒体が多い時代だったので、まず決まり、それ以外は割りばしをつくるとか、お弁当関係の容器を木製でつくろうだとか、ブリザーブドフラワーをつくろうだとか、いろいろ意見は出たそうであるが、椎茸の生産者が北見市内にいて、そのアドバイスをいただけるということで、最終的に椎茸事業に決まり、出荷先もイトーヨーカドーがあるので問題ないということで、印刷と椎茸に落ち着いたという経緯がある。

問) 今後、できる業種を検討して、さらに特例子会社をふやしてやっていただきたい。

答) 承知した。

問) どんな会社や組織でも、一緒に働く人たちのコミュニケーション、意思疎通が大事だと思うが、身体的または精神的なハンデがある方もいる。そういう従業員同士の相手を理解することが大事だと思うが、その辺の取り組みは。

答) おっしゃるとおり、そこが一番大変なところである。障害がある方でも上半身が健常者と同じであれば問題はないが、知的障害の方となると、話しかけるのが苦手だったり、そもそも人とあまり関わりたくないとか、そういったところで、悩みはある。支援する上司と二人三脚で、常にコミュニケーションをとり、仕事の指示や、困っていることがあったら話しやすい環境をつくって、本人が何を考えているのか意見が言えるような環境体制を整えている。

問) 印刷事業の関係で、関係会社の印刷物が多かったが、個人的なものも受けているのか。

答) 受けている。特に北見市内、地元のお店関係や民間企業の受注関係あるいは個人での依頼は受け付けている。

問) 山梨からもオーダーできるのか。

答) 大丈夫であるが、運賃でコストが見合うかどうか別途検討となる。

問) 県議会だよりとかそういう印刷をやっているか。

答) 印刷するデータはEメールなので大した値段ではないと思うが、出来上がったものを納品するコストがかかる。

問) 名刺も受注しているのか。

答) 名刺もやっている。ただ、弊社のセブン&アイ・ホールディングス社員の名刺は、基本的にほとんど受けていない。なぜかと言うと従業員が多すぎて、人事異動の際に対応しきれないという事情があるので、自分たちのキャパシティにあった印刷をしている。

問) 今就労A型、B型から一般就労へとなかなかうまくいかず、障害者の居場所という立場と就労という立場で難しいこともあるが、こちらではA型、B型から一般就労へ受け入れるような状況はあるのか。

答) 実際に隣の通所施設から通われる方は、業務委託という形で、一時期来ていただき、作業している。引き抜きという言い方は悪いが、実際作業できる一般就労その他ということで、判断してテルベでの採用に至った方もいる。

問) 就労に行くのも大変で、特にB型のところは、Aから行ったり来たりしているという話も聞いているので、それには受け入れる側でかなりサポートや福祉的なことも含めてやっていかなくてはならないが、体制的には福祉的な人はいないのか。

答) ここは、完全に一般就労である。



※株式会社テルベでの概要説明、質疑の様子（終了後、施設の視察を行った。）

### (3) 【北海道文教大学（育て教育地域支援センターの取り組みについて）】

問) こちらの学科は、子供の発達学をきわめれば専門家というか、そういうことを養成するような学科なのか、それとも教員も養成する、教育学部みたいなものなのか、この学科について教えていただきたい。

答) 私どもの大学は、もとは短大で、幼稚園教諭、保育士の養成をやっていた。ひところ、短大の大学化というか、合理化に向けた時期があり、生き残るためには四年制化せざるを得ないといったときに、幼稚園教諭、保育士の養成のほかに、何かプラスアルファの特徴がなければいけないだろうと。そういった場合、小学校の教員の免許を取る、あるいは特別支援学校の免許を取るなど、4つの免許を取れる学科を目指した。それで文部科学省にその申請に行ったときに、必修の資格ではなく、どれでもその中から希望する資格を取得という形で考えていた。しかし、免許、資格を持たないで卒業した学生って一体何なのって話になった。なので、例えば子供発達学というのがまだ確立されてはいなかったと思うが、この学科を出た学生は何を持って世の中に出ていくんだというものをしっかりさせるということで、それまでの計画を練り直し、文教スタンダードというか、第2案を持っていった。そうしたら審議会の先生に、短大は資格を出す学校だろうと、そればかりやっているのと言われ、その両方の指導を生かすような形の学科をつくらないと申請は通らないという、非常に難しい状態だった。

そこで、私どもとしては、理想としては、子供について深く広く学ぶ。少子化であればあるほど、子供は大事に社会の中で育てていかなければいけない。それは多分、子育て支援者の養成や、まだ子供学というもの、子供何とか学科ってたくさんあるが、じゃあこれは子供学ですっていうものがあるのかというと、いろんな学校の寄せ集めみたいな感じもあって、真ん中に軸があるのかないのか、そういったものもこれからつくっていききたいというようなことがある。現実としては、その後に学生は就職をしなければいけない、してもらわなきゃいけないと思い、私ども530人ほど卒業生を出しているが、大学院やその他学校など、20名ほど除いて全員就職をしている。そのうちの半分が幼稚園や保育所である。残りの半分ぐらいが小学校の先生、その半分ぐらいが施設の先生、特別支援学校の先生と。ほとんどが社会で活躍している。

なので、子供の発達学の探究はもちろん大事だが、子供について深く広く学んで、子育てのために活躍できる人材を育てたいという一方で、就職のない学校には学生は来ない。せっかく学んだことを就職して専門的な、ある程度それを生かすことを目的にしているわけで、子供の発達学というものと、現実には就職というもの、両方うまく融合するという事ではないかと思っている。

問) 保育士のキャリアアップ研修、山梨では県立大学とうまくキャリアアップ研修をやって、現場の方たちが大学と懇意にしているようなことがあるが、そのような現場の方たちと、この学科の交流というか、キャリアアップ講習をやっているなど、そういうのがあれば教えていただきたい。

答) 大学、学科としては、キャリアアップ研修というのは特に行っていない。私個人とし

ては、北海道のキャリアアップ研修の講座を幾つか担当したり、札幌市の私立保育所連合会の企画から一緒にやらせていただいた。教員何名かは保育所に関する事、幼稚園の連合会、協会の方たちとかかわりを持ち一緒に進めさせていただいている。

問) 幼稚園の協会、保育園の協会があって、今は認可外もあるが、このブロックが独立していて、その3つの関係がうまくいってないところがたくさんあるが、北海道はどうか。

答) 幼稚園の団体は、全国的に全日私幼連という幼稚園の団体が主としてある。保育園のほうは、保育協議会、社会福祉協議会とのかかわりでやっているところと、私立保育所連盟と、日本保育協会と3つあるが、その3つの団体が北海道ではそれぞれ、保育所団体がやっている。私保連という私立保育所のところは、札幌市ほぼ全体が私保連に加入するという形で行っており、札幌市内では3団体の活動が行われている。

主として私保連、全道ということではないが、集中している札幌市内の保育園、幼稚園との関連でいえば、それぞれの団体の長が情報交換するところまでは北海道の場合は行う。そういった形式で、先進モデル校、それからA1、A2、Bモデル校で課題に取り組んでもらっている。

問) 子育て教育地域支援センターはとても合理的な取り組みで、運営委員会の規程も読まさせていただいたが、子供の発達支援に寄与できる人材の育成、学校教育、そういう教育と、もう一つは地域の子育てに対する支援、両方2本立てで行われていると思う。このペンギンルームでいろんな取り組みをしていて、ニュースを毎月発行しているが、この周知の方法や対象者、例えばお母さんたちと一緒に大きなブロックで遊ぼうねというペンギンルームでニュースを発行している場合、たくさん来てくださいと呼びかけをしているが、この辺どこまでやっているのか。対象者がいるのか、あるいはこのペンギンルームのキャパシティも限界があると思うが、その辺はどう考えてやられているのか。

答) 文教ペンギンニュースに関しては、まずは大学のホームページに掲載をしている。学生と大学院生に関しては、掲示板に掲示したり、見えるところに張り周知すると、意欲があって研究したい学生も来ているので、そういう学生に手渡しするということがある。

それと、今通っていただいているお母さん方は、お母さん同士のつながりをかなり持っているので、そのお母さん方に渡すことで、その周りにいる方にも広く周知していただくような形をとっている。そして、このニュースを発行していることで、ホームページを見た方から電話をいただいた方から、次の発行はいつか教えてほしいというような、電話での問い合わせもある。

問) お母さん方も、このペンギンルームの取り組みに1回参加して、とてもいい感触を受けると、口コミや、一緒に誘ったりと、そういうことも想像できるが、あえて参加する人に事前の出欠確認はとらないということか。

答) 基本的には、そのような出欠の確認をとっていないが、ただし先ほど紹介したママサポートプログラムという、かなり人数を限定して行っていくプログラムに関しては、事

前の申込制や学生が企画しているものも事前申込制をとる場合がある。

問) 縫いぐるみの活用は、人の感情を緩和するというツールにはとても良いと思った。もう一つ、関係力を育てるために、バックグラウンドミュージックの工夫をしている。やはり人間の五感に訴えて気持ちが治るとか、より自分を出せるということでは、ミュージックの大切さをとても私も認識するが、どんな工夫をされてるのか。

答) バックグラウンドミュージックに関しては、フルバージョンですと42分少々、乳幼児を対象としているものに関しては、現在、30分程度の短縮バージョンを作成している。その中で、始まりと終わりは歌がついている、歌つきの音楽である。その後、中間の部分はクラシック音楽で構成されている。始まりと終わりは短調であるが、真ん中、中盤のところは長調になっているという工夫がされ、音量レベルも、最初と最後が上がるように工夫されている。

先ほどのテーマソングもそうであるが、遊びが始まるんだというようなことを音楽を聞いて感じて、自然に遊びに飛び出していく。そして、没頭して遊びを展開していくときには、邪魔にならない背景的な音楽になり、もうすぐ終わるんじゃないかということに、ルロイ・アンダーソンさんという人が作曲している『シンコペイテッド・クロック』というのを入れ、もうすぐ終わる時間が来ると予期できるような工夫をして、最後は『パジャママン』という歌つきの曲で終わるといったような構成になっている。

なので、子供が自然と遊びたい気持ちになって、そして元気に遊んで、自然と、あっ終わるかもしれないなということで遊び切って、遊びを終了させていくというような工夫がされている。

問) ペンギンルームのお友達全員と歌う、これもとてもいいと思う。私どもも県議会ですんなり場面ですまず県の歌を歌うとか、私は甲府市の出身であるが、甲府市のイベントですと、甲府市の歌をまず歌うとか、そういう意味で一体感を出すというお考えもあるのかなと思う。せっかくなので、時間があったらこのペンギンルームのお友達の歌を聞かせていただきたい。

答) 承知した。

問) 今、子育ての中で、虐待や、親の育て方、親自身の貧困の問題など、子育てがうまくいかない子供、そこへどうアプローチしていくのか自治体も困っているが、そういう子供をどうやってこのプログラムに引き上げていくのか。例えば市の保育士や保育園の方々から、そういう発達にちょっと大変な子供へのアプローチをここではどのようにされているのか。

答) 今の質問は、文教ペンギンメソッドという集団遊戯療法のことにかかわってくるかと考えている。この関係力育成プログラムというもの、その前身は行動空間療法と言われているもので、当時のセンター長がずっと研究を重ね、この行動空間療法を開発された。それを出発点とし、子育て支援の日常的な取り組みにということでペンギンメソッドに発展した。もともとは対人・対物関係に課題を持つ子供が、どんなふうにしたら集団で



一緒にほかの子供と遊んでいけるのかを考えて、発達支援の例えば指導方法として開発されたものになっている。

発達の中で、余りうまくいっていない大変な状況にある子供であっても、継続して通っているうちに、自然とほかの子供、お母さんたちと遊べるようになっていく印象的な実感を持っている。診断と治療という、リハビリテーションのような扱いの中ではないが、その前段階で、広く子供たち、お母さんたちを受けとめていく場として子育て支援というのはとても今日的に必要とされているものなのではないかと思う。なので、これまで障害の有無にかかわらず一緒に取り組んでいくという子育て支援という大きなくりの中で考えてきたという経緯がある。その中にはいろいろな発達の子供がいたということ、これもあるので、これもあわせて伝えたいと思う。

問) 例えば自治体と連携して、保健師などが、そういう子供がここに来れるまでの何か手だてをしていたり、そういう子供にここに参加させるような、そういう意図的なアプローチの仕方があるのか。

そして、これは有料ではなく無料で全部やっているかと思うが、どこかから補助金が出ているのか。

答) 困っている方がやはりここまでたどり着くのは大変なことである。ただ例えば、大学のいろんな公開講座の中の1つとして開講し、これをずっと続けており、そうすると、ふだんはなかなかこの扉をあけにくいのが、公開講座という形なら参加できると来てくれたり、それから近隣の千歳市のほうから来る方は、土曜日に開いたときは、ふだんは自分は来れないが、お父さんが土曜日にいてくれるから、きょうは初めて来ることができたと言ってくれる方もいた。

まだまだ、潜在的なニーズへの働きかけというところは課題があるかもしれないが、大学ならではの取り組みということで、講座という参加しやすいステップや心理学的な部分で、なかなか参加しづらいが、お母さん方のグループの中でも、そのママサポートプログラムのような形で、心理学的なベースで守られている場だからお話しできるというようなかわりをしているので、地道にそういったところを広げていきながら、困った方にどういうふうにメッセージが届くかということを考えていきたい。

答) 補助金については、ペンギンルーム、あるいは教育地域子育て支援センターに直接いただいている。一般的には、大学の経常費補助の中に特別補助という分野があり、その中の特色ある事業の大きなくりの中で少しいただいている。なお、ペンギンルームも含めて、センターにかかわる費用については、全て大学の費用負担という形で進めている。

また、近年は、若いお母さん、あるいは子育て中の親御さんなどが、いろんな公開講座に積極的に出てこられるように、託児所を設置してやっている公開講座もふえてきている。この託児所については、学生たちの実習にもなるので、学生の協力を得て、子供を預かりながら、親御さんたちにはしっかり公開講座を受けていただくという機会を設けている。これも全て大学のほうの費用負担という形で進めている。

答) 住民への周知であるが、公開講座の案内については、新聞の折り込みチラシを、恵庭

市や近隣の北広島市、千歳市に配布している。全戸配布ではないが、かなりの部数を配布している。このチラシには申込用紙がついており、それで申し込んでいただく形としている。また、当日参加でも大丈夫である。例年、延べ1,000人ぐらいの受講者があり、本学のような規模の大学としてはかなり健闘しているのではないかと思う。また一方、ペンギンルームの活動も公開講座と同じ形で募集しており、近隣地域の全戸に配布されているので、そういう事業があるということについては周知されていると思う。そこで新たに集まってくれたお母さんや子供が継続してペンギンルームの活動に参加するという形態もあるので、そういう周知の方法が有効に活用されていると理解いただければと思う。

問) ペンギンルームは常時、毎日あいているのか、講座をするときや相談を受けるときは時間を区切ってやっているのか。

答) ペンギンルームニュースに、いつどのように活動を行うかを周知し、その時間に開始している。そのほかは、学生の学習の臨床実習を行ったり、講義の練習をしながら行っていくもの、それから母親代表の連合会なども行っている。

問) 大学で子育て教育地域支援センターという場づくりをして、非常に合理的というか、山梨で思い浮かべると、県立大学や山梨学院大学、山梨英和大学でやっているようなことに加えて、市町村の子育て広場事業などを組み合わせた感じで、それを1カ所でできるというイメージで受け取った。恵庭市でも子育て支援センターといった組織によりやっているものが幾つかあると思うが、そこでの役割分担ができており、メソッドを生かした取り組みと、学生がここで、乳幼児の方、お母さん方、保護者の方と触れ合うという特徴が非常にあると感じたが、そんな受けとめ方でよいのか。

もう一つ、大学評価のところでも、こども発達学科の学生が小中学校にアシスタントティーチャーで行っているとあったが、ここにかかわる学生たちも、小中学校に行ったりするということもあるのかどうか、その相乗効果的な部分もあるのか。

答) そもそも子育てに関するセンターという建物があって、そこに職員が常勤でいるのではなく、学部も大学生の授業や学生の指導、就職、実習の巡回もやってという中での活動なので、常設ではない。

アシスタントティーチャーについては、小学校の教員の免許を取るのもので、そのために多くの学生が参加している。その中には、チャレンジド教室というものがあり、障害のある子供たちに来てもらって一緒に活動するというのが、非常に活発な活動になっている。そういうような取り組みが両輪となり、学科のふだんの授業や活動を支えていると思うが、大変に足腰の弱い組織で、今私どもとしては一生懸命やっているが、学外や行政とのかかわりがどうなのか、周知の方法はどうなのかということ聞かれると、極めて微々たる力の中でやっていると感じており、地域のニーズをいかに酌み上げるか、こちらに来ていただくようにという部分については、弱いなと思いつつ、でもこれ以上、今できるんだろうかという思いもある。将来的に子供の城みたいなものをつくり、独立した施設として、専任の職員もいて、それに教員がかかわってというようなことでやっていくとか、さらにはセンターというものをもっと大きないろんな活動ができる総合的

ホールにしていきたい。

そういった中で全国のいろいろなところを我々も見せていただいて勉強し、よりいいものにしていきたいと思う。

答) 恵庭市の子育て支援センターには、うちの学生がかなり多く担っている。部活を中心に、一般学生もその都度参加している。また、私ども附属幼稚園、札幌南区で離れているが、幼稚園の子育て支援ということで定期的に来てもらっている。恵庭市の子育て支援、それからうちの幼稚園の子育て支援、いわゆる一般の子育て支援というのは、保護者に対するレスパイトみたいなことと、子供同士のかかわりということ、2つの側面を持っている。ただし、今、御説明させていただいた事業との違いは、行っていく内容に理論的なバックボーンがあるかないかってことだと思う。残念ながら、うちの幼稚園も理論化することはできないし、恵庭市、ほかのところを見ても、なかなかそういうところは見当たらないので、そういった意味の今まさに作り上げている途中だと思う。



※ 北海道文教大学での概要説明、質疑の様子（終了後、施設の視察を行った。）

**(4) 【札幌市子ども発達支援総合センター・ちくたく（複合施設による支援の取り組みについて）】**

問) 分校と本校との交流はあるのか。

答) プールを使用する際に行き来したり、中学生は部活にも行っている。

問) この190万人都市で、この人数だと、まだほかに民間がやっているところがあるのか。

答) 児童心理治療施設はない。福祉施設は、知的障害の福祉施設は民間であと2つある。

問) これほどの大きな都市で、現場は相当大変じゃないか。

答) そうだと思う。

問) 発達障害は、今相当ふえてきているはずだと思うが、知的発達障害のこの通所の30名っていうのは足りているのか。

答) 足りてない。ただ、札幌市には500カ所近く、いわゆる旧児童デイみたいな施設があるので、かなりの割合で、幼稚園、保育園等に通っている方は、そちらのほうを利用しているのが多い。こちらはどちらかといえば毎日通う方なので、少し重度の方が入所している。ちょっと役割を分担している部分はある。

問) 児童相談所のかかわりは頻繁にあるか。

答) ある。

問) 190万人だと、札幌市内には児童相談所が4カ所ぐらいあるのか。

答) 1カ所である。

問) 職員はどのぐらいいるのか。

答) 1カ所に8係ぐらいあるので、130名ぐらいである。

問) ワンストップの推進室ということだが、どんな職員、スタッフか。また月なり年間なりで相談件数っていうのはどれぐらいあるのか。

答) まず、職員は3人である。現在職員は、心理職がほとんどであり、時折、ケースワーカーが入ったりしている。私らの思いとして、保健師や保育士、学校の教員などいろんな方がいたほうがいいと思っはいるが、設置されてまだ数年なので、なかなかそこは

うまくいっていない。

「もしも受診したいんですけど」「5カ月待ちです」「じゃあいいです」っていうような電話を含めて、初めて電話をかけてきた方がだいたい年間1,000件ぐらいである。3人体制なので、今の状況、電話がとれてないという状況である。結局、1人が相談に入って、1人が精神科の先生に呼ばれて、ちょっとお母さんの相談に乗ってくれて言われて、1人が保育所に訪問に行っていると、そうするともう部屋には誰もいない。この一、二年、相談件数が余り変わらないが、3人体制の中で電話をとれるのがそれが精一杯で、いない間にどれだけ電話が来てるかはなかなかわからない状況である。

問) 市立病院との関係はどうなっているのか。

答) うちが児童精神科の病棟をなくしたので、札幌市内の児童精神科専門の病棟がなくなってしまった。そこで市立病院に児童精神科の入所として相談できる専用病床3床をつくっていただいて、児童精神科に入院させたいというときには、市立病院のほうに相談をするという形にはなっている。

問) 市立病院に、まだ児童精神科があるのか。

答) 児童精神科はない。精神科の病棟の中に、児童を入院させる。本来は児童精神科の病棟が欲しいのは確かである。情短とかを持つと、やはり児童精神科の病棟や、施設でやったほうがいいので、実際はどこかに児童精神科の病棟があるほうが、施設のほうも落ちついて子供につき合えるが、ここがなくなった時点で、うまくいってないところである。

問) お母さんからしてみると、ちょっとっていうお子さんがいるけど、でもそれを認めたくないっていう感情もあったり、健診や、保育園、幼稚園など、そういうところからどういう経過で来るのが一番多いのか。

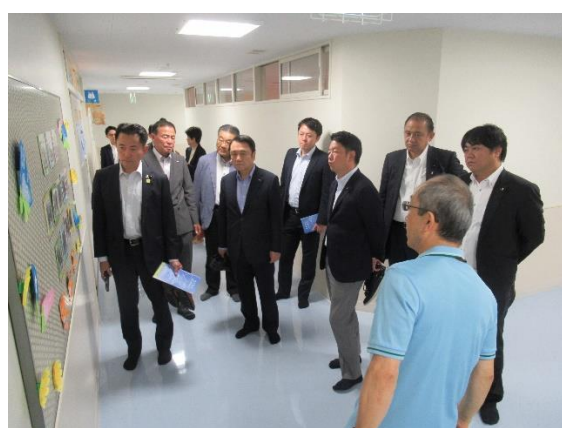
答) 幼児は健診後が多い。健診後と、あとは幼稚園、保育園に入ってみたら、ちょっと行ってみたらと言われたというのが多い。学齢になると、学校からの紹介もあるが、学齢になると、やっぱり問題がかなりはつきりしてくるので、親御さんが心配で調べたら、ここへ紹介されたということが多い。

問) 健診で、保健師からカードみたいなのがあって、それで来るなど、そういうシステムなのか。

答) 精密検査票がこちらに送られてきてという形である。ただ、うちだけでは診れないので、市内の児童精神科の病院にも行っている。

問) ここだけではとても対応できなくて、学校の先生や保育園、幼稚園、保育士、保健師など、そこの連携はどうこれからしていくのか。出前で行くのか、ここで研修するのか、ケース会議などを通じてやっていくのか、全体に広げていく何か案があるのか。

答) 当然、病院ではこういう入所があるので、ケースに関しては当然やっていく。出前も、やっている。必要があれば行きますという形で、学校支援、あるいは保育園支援という形もある。もう一つ、先生たちへの全体の研修も年に数度、ことしも9月に幼稚園、保育園の先生への親支援のシンポジウムをしたり、あるいは少人数で先生たちを集めて、より専門的な研修をしている。ただ、たくさん回数ができるかというと、地域支援室がほとんど担っているので、できていない。もし、それをやるとしたら、ちょっと考えていかないといけないのは、ここで実際に専門職がかかわる子供を少し減らしていかないと外に出ていけないので、その数、専門職を本当はふやしてほしいが、そのところを今考えながら、どうやっていけるかというのは悩みである。



※札幌市子ども発達支援総合センター・ちくたくでの概要説明、質疑の様子（終了後、施設の視察を行った。）